

『古代国家と北方世界』

鈴木 琢也

本書は、古代を中心とした北方史、所謂北緯四〇度以北の北方世界の  
実像にせまる一七の論考から構成された論文集となつている。本書の編  
集は、北方史、北方世界の歴史像解明にむけて学際的な共同研究を主導  
してきた小口雅史氏によるものであり、収録された論考は、この北方史  
に関連した考古学や文献史学の最新の研究成果をもとに執筆されたもの  
である。また、本書は編者小口雅史氏の還暦を記念して企画された。

本書は、地域と時代とを考慮し、第Ⅰ部「北海道からさらにその北へ」、  
第Ⅱ部「北緯四〇度以北の世界の実相」、第Ⅲ部「古代・中世国家の辺  
要支配」に編成されている。第Ⅰ部は北海道さらにはサハリン、靺鞨、  
渤海などについての論考、第Ⅱ部は、律令国家の国郡制の及ばない北緯  
四〇度以北、支配領域の境界、周縁の地であった東北地方北部について  
の論考、第Ⅲ部は古代・中世の中央国家勢力側からみた辺要支配につい  
ての論考で構成されている。収録された各論考の概要を紹介し、最後に  
全体を通した雑感を述べることにする。

第Ⅰ部「北海道からさらにその北へ」は、①天野論文、②中澤論文、  
③小嶋論文、④蓑島論文、⑤中村論文、⑥米家論文の六つの論考が収録  
されている。

①天野哲也「オホーツク文化における鍛冶の精神的な意味」は、七〜  
九世紀に羊角文（カスガイ形貼付文）が、バイカル湖西方地域からオホー  
ツク海域に拡がり、オホーツク文化では、この文様が施された土器が治  
金炉に転用されていたと論じ、羊角文の精神的な意味にも注目する。

②中澤寛将「北東アジアの葬墓制」は、五〜一三世紀の北東アジアの  
葬墓制を特徴づける円形周溝の成立・展開を検討し、日本列島北部では  
円形周溝を伴う墓が七〜一〇世紀まで用いられること。日本列島対岸地  
域では、靺鞨や渤海の封土墓に周溝がみられず、一〇〜一一世紀のパク  
ロフカ文化で円形・方形周溝が顕著にみられるようになることを指摘す  
る。さらに周溝墓が八〜一〇世紀の北方地域を特徴づける墓制として展  
開すると述べる。

③小嶋芳孝「ロシア沿海地方のパクロフカ文化期における墓上建物の  
新事例」は、北東アジア沿海地方のコクシャロフカ8遺跡（パクロフカ  
文化期）の方形石組基壇について、祭殿説を否定し基壇上に建物を設け  
て床面に墓坑を施設する墳墓であると述べる。この墳墓は、渤海の墓上建  
物の伝統を継承するものであり、パクロフカ文化の基層に渤海文化が強  
く影響を残していると指摘する。

④蓑島栄紀「七世紀の倭・日本における「肅慎」認識とその背景」は、  
「肅慎の朝貢」が、魏末〜西晋期に司馬氏による皇位篡奪を正当化する  
ため新解釈を加えたうえで重視され、その肅慎認識が東アジアに普及し  
たと述べる。倭・日本においても、『日本書紀』で乙巳の変後の新政権  
を正当化するため肅慎記事を用いたと指摘する。

⑤中村和之「流鬼国をめぐる試論」は、『通典』や『唐会要』『新唐書』

など中国史料にみえる「流鬼国」の位置について論じる。「流鬼国」の位置についてはカムチャッカ半島説とサハリン島説があるが、一八世紀以前の中国王朝ではカムチャッカ半島が地理認識に組みこまれていないことから、「流鬼国」はサハリン島にあったと考えるべきであると指摘する。

⑥米家志乃布「長澤盛至作製『東蝦夷地海岸図台帳』にみる地域情報の収集と表象」は、安政二年の『東蝦夷地海岸図台帳』に描かれた地域情報と絵画表現を検討し、地域情報の収集と表象は、蝦夷地を「和人の土地」として表現する幕末蝦夷地の沿海図群にみられる風景画集の流れにあると述べる。

第二部の「北緯四〇度以北の世界の実相」は、⑦小野論文、⑧木村論文、⑨齋藤論文、⑩関根論文、⑪伊藤論文、⑫八木論文、⑬武井論文の七つの論考が収録されている。

⑦小野裕子「続縄文文化後半期の東北地方と北海道の関係について」は、東北地方への続縄文文化「後北C<sup>2</sup>・D式土器」の分布拡大を検討する。関係土器群間の時間的関係を整理し、東北南部で続縄文文化「後北C<sup>2</sup>・D式土器」と古墳文化「塩釜式土器」の接触がはじまった後も、東北北部では弥生文化「赤穴式土器」が存続し、続縄文文化「後北C<sup>2</sup>・D式土器」との接触が東北南部よりも遅い時期までつづく」と指摘する。

⑧木村淳一「青森平野における古代集落の様相」は、青森平野の古代集落の様相について、これまで丘陵上の集落を中心とした調査をもとに論じられてきたという問題を指摘し、青森平野内での環境変遷における潟湖、浜堤の位置づけと平野内部の微高地における古代の土地利用を

考慮して論じるべきであるとする。また、一〇世紀前葉に青森平野丘陵上の集落で集落構成の多様性が顕著になることから、「日本国」の国家領域やそれに準ずる地域の社会習俗などの流入が増加したと想定する。

⑨齋藤淳「古代北奥における集落・竪穴建物の動態について」は、北奥における七〜一〇世紀の集落、竪穴建物数の推移や動態を検討し、北緯四〇度ラインを境界とする南北差、奥羽山脈を境界とする太平洋側と日本海側の東西差を指摘し、それらは土器属性の地域差とも調和的であるとす。北奥地域は等質ではなく、政治体制も含めた社会のあり方がグループごとに異なっていた可能性を論じる。

⑩関根達人「三重の塚をもつ北奥の古代集落」は、三重の環濠をもつ古代「防御性集落」・山本遺跡の測量調査をもとにその構造を明らかにし、北奥の「防御性集落」は立地・構造に多様性が認められるが、山本遺跡はそのなかでも高い防御性を備えた集落であると指摘する。

⑪伊藤博幸「古代閉村に関する二、三の問題」は、三陸沿岸部の閉伊地方において、長根古墳群と房の沢古墳群が造営された二地域に拠点的集団が形成されたと指摘し、その二拠点を掌握したのが『続日本紀』にみえる須賀君氏やその一族であったと述べる。

⑫八木光則「アイヌ語系地名と蝦夷」は、「ナイ」、「ペツ」などのアイヌ語系地名の分布を検討し、それらが系統と形成時期を異にした多様性を示し、それぞれが縄文時代にさかのぼると述べる。また、東北北部の古代蝦夷の言語がアイヌ語系に近いものであり、九〜一〇世紀に日本語化する」と指摘する。

⑬武井紀子「北奥地域における出土文字資料と蝦夷」は、青森県の遺

跡から出土する文字資料（墨書・刻書土器、木簡など）の特徴を検討し、律令祭祀や仏教の影響と在地の信仰とが結びついた独自の様相を呈すると述べる。そのなかでも仏教的要素が蝦夷社会の文字伝播に重要な役割を果たした可能性を指摘する。

第三部「古代・中世国家の辺要支配」は、王権側からみた辺要支配を論じた⑭永田論文、⑮三上論文、⑯浜田論文、⑰大塚論文の四つの論考が収録されている。

⑭永田一「鎮守府將軍と出羽城介についての基礎的考察」は、「鎮守府秋田城体制」説に関する研究を整理し、鎮守府將軍と出羽城介が受領官であるかを検討する。鎮守府將軍・出羽城介と国府の関係においては、徴税権限のみならず国府から独立した行政権限の有無が重要であるとし、そのうえで鎮守府將軍と出羽城介は受領官とはみなせないと指摘する。

⑮三上喜孝「古代北方辺要国の統治システム」は、主に出土文字資料の検討を通じて、北方の辺要国（陸奥国・出羽国・越後国）では国司が国内を分担して統治する「国司分担統治システム」が行われていた可能性を指摘する。北方の辺要国は、もともと歴史的背景の異なった地域を併合して成立した事情があり、従来の支配方式では統治できないため、国司による直接的な支配システムが構築されたのではないかと述べる。

⑯浜田久美子「渤海使の出羽来着について」は、渤海使迎接を根拠とする秋田城国府説を否定し、出羽国・秋田城は、来着する渤海使には対応はしたが外交基地・窓口にはならなかったと述べる。秋田城は渤海使だけに限らない交易使節が来訪する北方交易の拠点であったのではないかと指摘する。

⑰大塚紀弘「鎌倉時代の津軽安藤氏の蝦夷統治」は、北条得宗家が津軽外浜・西浜の地頭職を継承し、蝦夷居留地の治安維持、交易に伴う徴税により収益を得るようになったこと。津軽安藤氏は地頭代として現地の実務を担い蝦夷交易による収益を得て、その一部を北条得宗家に貢納していたが、その地頭代の地位をめぐり一族を二分する紛争を起こしたことなどについて考察する。

本書に収録された各論考の概要を紹介してきた。論点が多岐にわたっており、その全てを紹介することができなかったことをお詫びしたい。最後に本書全体を通して雑感を述べ、むすびとしたい。

第一部「北海道からさらにその北へ」では、①天野論文、②中澤論文、③小嶋論文において、冶金炉転用土器（羊角文）、円形周溝墓制、方形石組基壇を通して、北緯四〇度以北の北方世界の地域集団が相互に関連する可能性が指摘されており、今後の研究の進展により、さらに具体相が明らかになるものと考えられる。史料上の北方集団を扱う④葦島論文、⑤中村論文との関連を考慮していくことも今後の課題であろう。一方で、離れた地域間において、類似した属性をもつ遺構や遺物などがみられた場合、即座にそれらに関連性を付与することや、史料上の北方集団に考古学的な地域文化集団をあてはめることには慎重であるべきと考える。第一部の論考から明らかのように、北海道から北東アジア地域における研究の進展は顕著であり、日本古代・中世国家や東北地方北部地域などとの交流・物流や政治的關係などが議論できる段階にきていると理解される。

第Ⅱ部の「北緯四〇度以北の世界の実相」では、各論考をみて明らか  
なように、北緯四〇度以北の境界、周縁の地であった東北地方北部の社  
会構造の解明が飛躍的に進んでいることがわかる。これらの論考は、船  
木義勝氏を中心とする東北地方北部の研究者により進められた研究の成  
果『9～11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界  
の実態的研究』（東北古代集落遺跡研究会編 二〇一四）や『北東北  
9・10世紀社会の変動』（日本考古学協会編、二〇一六）、小口雅史氏が  
主導してきた共同研究の成果『北方世界と秋田城』（小口雅史編、六一  
書房 二〇一六）、所謂古代防衛性集落研究の成果「北の防衛性集落と  
激動の時代」（三浦圭介・小口雅史・斉藤利男編、同成社 二〇〇六）、  
そして『青森県史資料編古代2 出土文字資料』（青森県史編さん古代  
部会 二〇〇八）など一連の精力的な共同研究の成果に依拠してまとめ  
られたものと考えられる。第Ⅱ部の論考では、東北地方北部の竪穴建物  
跡数増減（人口の増減）などからみた地域集団の移動・移住の動態、東  
北地方北部から北方世界を含めた地域間交流や交易の様相、律令祭祀や  
仏教の流入と独自の信仰の形成などの社会構造が具体的に明らかにされ  
ている。特に、⑫八木論文、⑬武井論文のようなアイヌ語系地名や出土  
文字資料による研究は、今後さらに東北地方北部の社会構造に踏みこん  
でいくうえで、重要な要素となるであろう。編者小口氏も序で述べるよ  
うに、この地域の共同研究が考古学と文献史学との融合のモデルケース  
となったことも本書を一読すれば理解できる。

第Ⅲ部「古代・中世国家の辺要支配」は、王権側からみた辺要支配を  
論じた各論考から構成されているが、先述した第Ⅱ部論考の研究成果な

どにより東北地方北部地域社会の新たな歴史像が解明されてきたことに  
も関連して、その多様な社会に対する支配の諸相にせまる⑮三上論文、  
⑯浜田論文などの論考がみられた。これらの論考は、辺要支配について  
新たな視点を提示するものであり、古代秋田城の性格をめぐる議論にも  
一石を投じるものである。

以上のように、本書は、第Ⅰ部、第Ⅱ部、第Ⅲ部に編成される広範な  
論考を収録し、異なる視点から多様性と相互関連性を導きだし、北方史、  
北方世界の实像にせまろうと試みた点に特色がある。今後、総合的な北  
方史研究を進めていく際には必ず参照されるべき一書であると考ええる。

（小口雅史編『古代国家と北方世界』、同成社、A5判、二八三頁、二  
〇一七年十月刊行、七五〇〇円＋税）

（すずき・たくや 北海道博物館学芸主査）